

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人 **小羊学園**

〒431-1304

静岡県浜松市北区細江町中川7440-1

電話：053-437-0826 FAX：053-437-0849

E-mail kohitsuji@imix.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人

印刷所：聖隷サービス(有)

定 価：一部 30 円

2008年7月20日

第 305 号

ソーシャル・インクルージョン

理事長 稲松 義人

今年の四月から、お隣にある聖隷クリストファー大学の演習室をお借りして、毎月一回というペースで「インクルージョン研究会」という会合がもたれています。この研究会が始まるきっかけになったのは、今年の三月に開催された「はままつフォーラム」でした。

浜松フォーラムは、グループホームやケアホームの必要性等について、行政や地域に理解を広げたいということ、法人や施設の枠を超えて取り組みはじめたソーシャルアクションでしたが、それをきっかけに、同じ地域でのこれからの事業展開、具体的な支援の面でも連携していきたいという目標を感じながら集まっています。実際の定例会の出席者は、大学の社会福祉学部の山本誠先生を中心に、今のところ毎回一〇名足らずというところでしょうか。私も、毎回は出席できませんが、できる限り出席したいと思っています。

研究会の名称になった「インクルージョン」は、社会福祉の世界で、最近よく耳にする外来語です。私が始めてこの言葉を耳にしたのは、少し前のことですが「インテグレーション(統合)」に對比して使われたように記憶しています。つまり、社会生活の様々な面で障がいのある人とならない人を合わせて

(インテグレーション) 取り組みをしようにするのではなくて、障がいのある者もない者も本来は同じ社会の中に含まれている(インクルージョン)と考えるべきなのだということだったと思います。

しかし、研究会の中で「ソーシャル・インクルージョン」という発想は、もともと社会福祉の分野で生まれたのではないということも教えられました。確かに、すべてを包括する中で発想するのであれば、社会福祉の立場からの発想に偏るのも本来ではないかも知れません。社会全体を何らかの枠組みで分けて、その枠の中で発想するとき、少なからず全体像とは違った理解になってしまいます。社会の中には障がいのある人もない人も、お年寄りも子どもも、男も女も、外国からの寄留者もいます。経済力のない人も、少数派の人も包括して、「すべての人が助け合っ

てみんなで生きていく」ために、福祉だけでなく、医療、教育はもちろん、産業、環境、平和、行政などなど、あらゆる側面から考える必要がでてきます。そしてそのためには、全てを画一化するのではなく、それぞれの違いを尊重しながら共に社会を形成していくということになるのだと思います。

日本の法律の基となる憲法を見ると、健康で文化的な生活を保障する第二十五條もそうですが、「すべて国民は」と表現されています。また別の条項では、「何人(なんびと)も…」と表現されているものもあり、国民の枠をさえ超えて、すべての人を包括的に捉えていることが伺えます。

しかし、それを法律や制度として具体化するときは、あるいは私たちが日常的に決める小さなルールにおいても、それぞれの人がもっている様々な条件によって便宜上別々に考えることはよくあります。そして結果的に、本来もつべき共に社会を形成していくことの障害になってしまっているところがあるのではないかと反省させられます。

インクルージョンの反対語は「エクスクルージョン(排除する)」というのだそうですが、私たちは、自分の安心のために、自分のもつべき責任の中から、一部の人を排除して、関係性を断ちたいという意識が働きがちなのではないかと思えます。私たちが当然のことのように自分を中心にし、自己実現をめざして生きようとするとき、他者をエクスクルージョンしようとする心理が働いているような気がします。それに反し、インクルージョンの発想に立つということは、自覚的に生き方を転換していくことにつながるのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

寄稿

聖書の言葉の力

遠州栄光教会 牧師
森田 恭一郎



今回「教会の社会福祉の現場との連携」について原稿の依頼を戴きました。小羊学園と教会の既にある連携については、学園が創立以来、遠州教会はじめ諸教会との繋がりを大切にしていることは感謝であります。私たち遠州栄光教会は昨冬季に教会堂を新しく献堂しましたが、早速にクリスマス会の集会を教会で開いて下さいました。嬉しかったです。また来て下さい。それから毎年教会の者たちを快く小羊学園の聖歌隊メンバーに加え入れたり、地域の諸

教会の奉仕の場を提供したり、学園の礼拝に折あるごとに教会の牧師を迎え入れたりして下さいます。評議員に遠州教会の牧師が加わっています。また静岡県の地域は私たち日本キリスト教団東海教区に属しますが、教区総会にて稲松理事長が挨拶下さいます。

その東海教区には「宣教基本方針」があり、医療・福祉・教育の場で働く教会の人たちを宣教の担い手として受けとめ「教区はこれらの担い手の自主性を重んじつつ、各々の遣わされた場において、宣教の務めを有効に果たすために、必要な協力と支援を行う」と謳っています。また遠州栄光教会はその「基本精神」において当教会が「聖隷グループ（小羊学園、十字の園、聖隷福祉事業団など）の様々な働きのために執り成し・奉仕することを使命とする」と謳います。具体的にどれだけのことが出来ているかはともかく、小羊学園はじめとするその働きを応援したい私たちの思いのあることはご理解いただけると思います。

小羊学園はキリスト教施設として、「小さい者の一人が減びることは天にいますあなたの方の父の御心ではない」という百匹の羊の譬え話の聖書の言葉掲げ、日々子どもたちとの関わりの中で、一人が減びないように、その思いを大切にしておられます。この意義は『この子らからの贈り物』の



児童寮・青年寮の夏まつり

「聖句暗唱」で山浦俊治さんが書き遺して下さった文章にもよく表れています。「あの子は明日家に帰す」と思った俊治さんに、職員が小首をかしげながら言ったこの聖句が、帰すことを踏み止まらせた、という話です。職員がキリスト教徒であろうとなかろうと、この聖句が身につけている限り小羊学園の志は守られていく。そう感じさせるものが職員のお姿から伝わってきます。併せて職員をそのようにさせていく聖書の言葉の力を感じます。

私にとって地理的に身近な青年寮、児童寮、デイケアホームの職員の姿に接します。散歩している時、創立記念日やクリスマス会の集会や土曜日の礼拝の時などのお姿です。誤解を恐れず言うと、職員が何か職員らしくなく、家

族みたいな感じですが。もちろんプロの職員なのですが…。何を言いたいかというと、職員として「さあやるぞ」と意気込んで仕事にかかるというより気付けてみたら神様の御業の中に用いられている。「一人も減びない」という御心を神様ご自身が実現していくために、皆さんを招き用いて下さっている。私にはそのように思えます。

また、子どもたちだけでなく、職員も子どもたちの家族の皆さんも、みんなが一匹一匹の羊であって、減びない一人ひとりです。若樹学園やつばさ静岡もきつと同じです。「食卓を囲む子らは、オリブの若木。見よ、主を畏れる人はこのように祝福される」。祝福へと招き入れられているのは食卓を囲む子らだけではありません。「驚のように翼を張って上る」のは子どもたちだけではありません。若樹学園、つばさ静岡に関わる全ての人々が祝福の中にあります。浜北教会や静岡草深教会との関わりの中で、聖書の言葉が新しく祝福をもたらしますように。

『この子らからの贈り物』に、いなくなつた一人が不思議な仕方で見えられた時「今日も守られていました」と俊治さんが言われたように、神様の御業が日々小羊学園の働き全てに及んでいる、と私たちは教会と小羊学園の関わりの中で教えられつつ、確信をもって言うことが出来ます。聖書の言葉による力ある祝福を祈ります。

小羊学園を支える会の歴史

社会福祉事業を支える経済的な環境がますます厳しくなっています。厳しいのは何も福祉に限ったことではないと言われます。しかし、生きていくために欠くことのできない支援を受けている人たちの立場に立てば、これは深刻な事態です。制度がどうであれ、何としても継続しなければならぬのです。職員の中には創立期の苦労を知らない人たちが増えています。私たちの働きはそれを大切に思ってください、周囲から応援してくださる方たちの支えがあって、これまでなされてきました。これは昔も今も変わらないと思います。

今回、小羊学園の移転改築のために多く皆様からご支援をいただいたことを契機として、小羊学園を支える会についてあらためて見直してみたいと思っています。そこで今回、小羊学園を支える会の歴史を少し振り返ってみたいと思います。

小羊学園が開園した一九六六年（昭和四一年）の十一月に「小羊学園および里親の会機関紙として「小羊だより」第一号が発行されています。この中に七月一九日の朝日新聞の記事が転載されており、次のようにあります。

静岡県 好評のおやつ里親 施設に愛の寄付金ぞくぞく

小羊学園（山浦俊治園長）にこのほど「おやつ里親」というものができ、子どもたちは心のこもったおやつをもらって大喜びだ。同学園には三歳半〜一四歳までの重度の精薄児三〇名がいるが、国や県から支給される食費は一日一四九円で、おやつ代はなく…。（中略）山浦園長の知人の平出光梟青少年対策室長を通じて呼びかけ、平出さんが里親第一号に名のり出た。つづいてこの一ヶ月間に個人、グループ、匿名を含め、約一〇〇人の里親ができた。（後略）

また、同じ機関紙に次のような説明が付かれています。

小羊学園 おやつ里親の会について

これは会の規約ではありません。私たちがからお願いです。

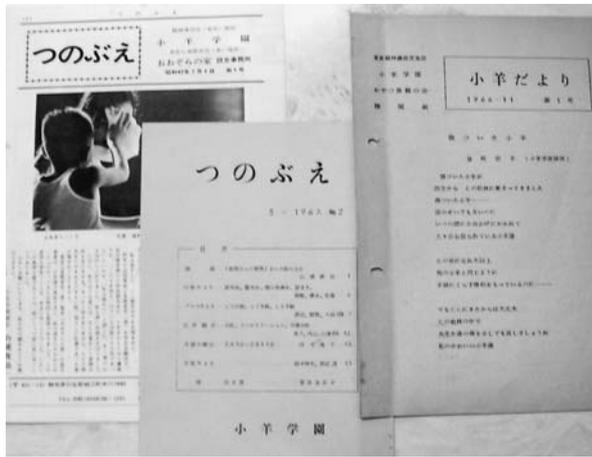
- 一、毎月三〇〇円あて子供達へのおやつ代としてご送金ください。
- 一、できたら、皆さんの事、御家庭の様子がわかる短いおたより下さい。
- 一、機会をみて是非小羊学園をお訪ね下さい。
- 一、重度の障害児の問題にいつも関心をもって下さい。そして社会の中でよき理解者であり、発言者であって下さい。

私たち小羊学園は、次の事を守ります。

- 一、いただいたお金は、子供達のおやつや食卓を豊かにするために、又健康の増進のために大切につかわれていただきます。
- 一、この「小羊だより」やお手紙で小羊学園の様子をお知らせします。

その後、この「小羊だより」がどのように継続されたのか、手元に資料はありません。しかし、この開園直後に始められた「おやつ里親の会」が現在の「小羊学園を支える会」の原形であったと思われる。

「つのはぶえ」は、当初は入所する子供たちの家庭へ向けて発信するために編集されたようです。一九六七年三月に発行された第二号はA5版の一六ページの小冊子になっていますが、第一号



は開園直前に発行されたことが記事の中から読み取れます。これもその後どのように継続されたのか、資料として残っているものではありません。

その後、つのはぶえが新たに第一号として復活しているのは、一九七二年（昭和四七年）七月で、小羊学園とおおぞらの家設立事務所の連名による発行になっています。一九七三年五月に開園したおおぞらの家（現在の聖隷おおぞら療育センター）の、開設準備の時期になります。同年一二月の第二号には、現在の当時の皇太子殿下ご夫妻のご来園された記事が掲載されています。その後、一九七四年二月に第三号が発行されていますが、この最後に、「羊と空の会」の説明として、「二つの施設の経済的困難を助けるための後援会です。皆様のあたたかなご支援をお願いします。」という呼びかけがあります。

機関紙の発行は、小羊学園となっていますが、寄付金の受け入れ先は、一九七六年（昭和五一年）三月までは、「羊と空の会 代表 山浦俊治」となっています。一九七六年四月から「小羊学園を支える会」と名称が変更になっており、これが現在まで継続していることとなります。

その後、寄付金を送って下さる方、物品をご寄贈して下さる方、ボランティアとしてご奉仕くださる方に、つのはぶえをお送りしてきました。

小羊学園の働きのために、自分たちだけで満たせないところを、是非ご支援いただきたいということなのですが、経済的に満たされれば必要ないというのではなく、多くの人たちに支えられて必要な支援をすることができるとが大切であって、自分たちの力だけで完結できれば、その方が気楽でよいというものではないのだと思います。

次の時代を見据えて 三方原スクエアでの挑戦③

稲松 義人

重い障がい（医学モデルではなく）を社会モデルで考えようと、多くの場面で特別な配慮とかなりの手間のかかる支援が必要な人ということになるのではないのでしょうか。このような人がご家族と一緒に生活しているとき、継続的に支援するためには、複数の人が交替して関わることでできることが重要です。ご本人からすると様々な要求、希望もあるのでしようが、その要望、場合によっては不満や訴えを援助する人が一人で受け止めながら、それに対応していくことは精神的にかなり大変だろうと思います。施設は、利用する本人にとって生活の一部になります。在宅で日常的に援助される人たちのレ

小羊学園を支える会は、福祉社会を願う人々たちによる市民参加型福祉の展開だと言えるのではないかと思います。



夏まつりでの盆踊り

スパイトのためにも大きな役割を果たしています。障がいの重い人の場合、そのニーズは日中だけではなく夜間の対応についても重要です。日常的な援助者の他に、家族内や近隣社会の助け合いの中で、代替りの援助者が得られるようになることはよいことですが、いざというときに二四時間対応できる施設（支援システム）があることは、地域で生活する人たちの安心感のためにはとても大きなことです。

三方原スクエアにおいて、居住空間がより家庭的に近い規模になり、日中活動と夕方から朝にかけての支援が分けられたことは、地域に住む人たちの利用時においても変わってくることに

小羊学園移転計画

居室棟の一部は完成に近づいています。



どうぞ、目標達成のために続けてお祈りください。皆さまの周囲で新たにご協力いただけそうな方をご紹介いただければ幸いです。今回も心からの感謝をもって中間報告をさせていただきます。

（寄付金の進捗状況のグラフは次号に掲載します。）

小羊学園・移転改築計画にご協力ください （口座名義）「小羊学園を支える会」

郵便振替口座 00890-4-45415
りそな銀行浜松支店（普通）040005
静岡銀行細江支店（普通）043483

必要があれば、募金のお願い（振込用紙）を、お送りいたします。下記へご連絡ください。

問い合わせ先：小羊学園

〒431-1304 浜松市北区細江町中川 7440-1

電話 053-437-0826

編集後記

四歳で入園したときから帰省する家庭のないO君を、子どもの頃から毎年受け入れてくださった富山市のAさんのところに、今年も送って行きました。O君は、青年寮を経て、今は温心寮（地域ホーム）に住んで、日中はオリブの樹（通所施設）に通っています。今年には四六歳、富山のお母さんも八〇歳を過ぎておられますが、娘さんやお孫さん、今はひ孫さんもO君を迎えてくれます。年に一度、温かく迎え入れてくれる富山のおうち、O君にとってかけがえのないところですよ。私もまた平和を感じたひとときでした。(I)